



TOKYO METROPOLITAN THEATRE
ARTISTIC DIRECTOR
HIDEKI NODA

ONE'S
voice
VOICE.24

ロングインタビュー 野田秀樹
東京芸術劇場芸術監督

集まった人たちが自分たちで
動き出す“場”をつくりたい

劇団 夢の遊眠社時代のエディンバラ演劇祭、留学、『赤鬼—RED DEMON—』の挑戦と挫折、
『THE BEE』の成功と、野田秀樹の演劇人生にとって、ひとつの重要なメルクマールとなっていたイギリス。
この4月～5月にかけては、ロンドンで注目度の高い劇場のひとつ、
ソーホー・シアターで『One Green Bottle』を上演した。
同作のルーマニア・シビウ演劇祭での上演を控え、着実に国際的になりつつある活動と、
世界的な人脈を活かした東京芸術劇場での俳優育成について聞いた。

イギリスで初めて、自由に演技ができた

— 『One Green Bottle』ロンドン公演は、かなりの数の劇評が出て、大半が好意的な内容でした。野田さんご自身はどう反応を感じていらっしゃいましたか？
野田 舞台上立っている時から手応えがありました。これまでの作品は、カーテンコールが来るまで反応がわからなかったんですけど、『One Green Bottle』は喜劇性が強いからでしょう、最初から客席のリアクションがぼんぼん来て、ノってくれているのがよくわかりました。そういう意味では、役者として初めてイギリスで自由に演技ができたというか、日本と同じような感覚でやれました。
— 野田さんが俳優に集中できたというのは、7年前の『表に出ろっ！』とはっきりと違う作品になったということですね。
野田 そうですね。完全に違う作品になったと思いました。
— キャサリン・ハンターさん、グリーン・プリチャードさんという素晴らしい共演者の力もあったと思いますが、全編を翻訳して英語で上演したことが、新たな発見につながったのでしょうか？
野田 翻訳を丁寧にやったことはとても大きかったです。「翻訳が上手く行っている」「言葉がおもしろい」という感想をたくさんもらいました。担当してくれたウィル・シャープは、若いけれど才能豊かで、自分で作・演出をすることもあって、稽古場で一緒に考えることを厭わない人。それがすごく良かったと思います。
— 生きた言葉を探してきて、選ぶ力のある方なんですね。
野田 だから逆に、嫌いという人もいましたが。と言ってもウィルだけのせいではなく、僕の戯曲に生きた言葉から生まれる下品な表現があるからなんです(笑)、それを英語で言う時に、いくつかある候補の中で1番下品なものを選ぶのが彼で(笑)。たとえば、イギリス人にとって、言っても聞いてもドキッとさせる言葉を使うべきか別の表現にするか、初日の朝ギリギリまで考えて、言うことを選んだんです。すると案の定、その単語をキャサリンが言った途端、客席の空気が一瞬、スッと引いた。それで舞台上の僕も「あ！」という顔になり、お客さんの反応も僕の気持ちも察したキャサリンが、その感情の

まま、せりふでもある「sorry」と言ったのがドツとウケたんです。
— 今回の反応のビビッドさは、これまでの野田さんの作品を観たことがある人がベースになっていたりするのでしょうか？
野田 そこはよくわかりませんが、知っている人が増えているのは確かです。その一方で、マチネには、いかにもいつもは庭いじりをしていそうな、ごく普通の年配のご夫婦が客席に何組もいます。劇場に行くのが日常の習慣になっている人たちが、イギリスにはたくさんいるんですね。彼らは僕たちの名前で見に来たわけではなくて、たまたま来た日がこの演目だった。そうすると、最初は明らかに「ん？ なんだこれは？」と戸惑っている感じなんですけど、終わるととても熱い拍手をくれる。そういうやりがいを感じることも多かったです。
— 『One Green Bottle』というタイトルは、イギリスの古い数え歌から取り、ラストシーンでその意味がわかるようになっていますが、そこは伝わっていましたか？
野田 タイトルがその歌から来ているというのは、ほとんどの人がわかっていたはずで、最後に「そういうことか」と合点が行ったと思います。それとこの作品の終わらせ方が、イギリスで上演されている多くの舞台と比べると、かなり曖昧さを残しているんです。彼ら(登場人物たち)は死んだのか、死んでいないのかという点を観た人の解釈に委ねています。こういう不明瞭な話は嫌いというイギリス人もまだいますが、以前と比べると、曖昧さに対する許容量はかなり出てきた気がします。この終わらせ方がおもしろい、と評価してくれる人がほとんどでした。
— このプロジェクトは海外公演を見据えてスタートしたものだと思いますが、6月のルーマニアのシビウ演劇祭でも上演が決まりました。それ以降のご予定は？
野田 ロンドンでやって何が良いかという、各国のプロデューサーが観に来てくれることです。ヨーロッパだけでなく、ニューヨークからも来だし、アジアからも結構、足を運んでくれました。そしてかなり反応が良かったので、オフナーは来ると思います。問題は、キャサリンのスケジュールがかなり詰まっていることですね。
— 『THE BEE』よりも売れそうですか？

Photo: Akira Suemori

野田 こればかりは、時がたたないとわからない。『THE BEE』も「またやらないの?」と言ってくれる人がいますから、今後の上演の予定がゼロではありません。今回も「あの作品のカンパニーがつくった」というので見に来てくれたプロデューサーたちが多かったです。

—— 海外での活動と言えば、パリの国立シャイヨー劇場での3度目の公演も決まりました。シャイヨー劇場では『THE BEE』『エッグ—Egg—』を上演し、野田戯曲が字幕で追いつけるのかという当初の心配をよそに好評を得、ツアーが定番化しつつあります。

野田 そうそう、秋の『贗作 桜の森の満開の下』の宣伝に、ロンドン公演中に1日だけパリに行ったんです。シャイヨーは観客の会員組織を持っていて、会員だけが入場できる年間のラインナップ発表会を開くんです。そこでラインナップされた演出家が各作品について話したり、振付家やダンサーがちょっとしたパフォーマンスをしたりするんですね。その時に劇場の人から「お客の入りの心配はそんなにしないでいいよ」と言われたんです。発表会のあと、参加者からも声をかけられました。まだ2回しか公演をしていないのに、定着している部分があるのかなとうれしくなりましたね。

—— 理由は何だとお考えですか?

野田 フランスの観客は、ダンスやサーカスを見慣れているからか、フィジカルな表現に対する理解が早いし深い。字幕では十分に理解できない言葉の問題より、ビジュアルから受け取るインスピレーションのほうを大事してくれる人が多いようです。最初にパリ公演をやった時に、反応が想像以上で驚きました。—— それにしても劇場のラインナップ発表会を、会員だけに向けて開催するというのもおもしろいですね。日本では聞いたことがありません。

野田 発表会の説明やパフォーマンスで「おもしろそうだな、行ってみようか」となる感じ。僕は、今回トップバッターで、つい真面目なトーンで話してしまっていて、あとから結構凝ったパフォーマンスをする人たちがいるのを見て、ちょっと後悔しました(笑)。いつも通りでも良かったのに。でも確かにあの方式はとても良い。会員制の組織化はすぐには難しいでしょうけど、芸劇の今後の活動のヒントにしたいと思いました。最近よくする話ですが、どの劇場でもこのところほとんどの海外カンパニーの来日公演が集客に苦労しています。芸劇も選りすぐりのカンパニーを招聘して素晴らしい作品をやってもらっていますが、パブリシティが弱いのか、空席が目立ってわざわざ来てくれた海外のパフォーマーたちに申しわけないやら情けないやらそんな思いをすることがあります。「今年はこんな演目をやります」という会見をお客さんに向けてやるのは、関心も引くでしょうし、偉そうに聞こえてしまうかもしれませんが、観る目が育つことにつながるのではないかと思います。

—— イギリス、韓国、フランスと、作品を上演しながら現地のネットワーク

も増えてきて、例えば、キャサリンさんやグリーンさんと同じようなパートナーシップを結べる俳優との出会いはありそうですか?

野田 もうたくさんいますよ。今回も来てくれて「いつでも秀樹と仕事するから」と言ってくれましたし、僕が「良い役者だな」と思っていた人が初めて観に来てくれて「秀樹のワークショップはどうやって出られるんだ?」と聞いてきました。「日本でしか予定がないんだ」と言ったら「じゃあ日本に行くよ」とまで言ってくれた人もいました。

ひとりの才能が引っ張るより、自主的な集団

—— ワークショップのお話が出たところで、前号のインタビューで俳優養成について、芸劇として活動しているし、さらに継続していきたいというお話がありました。その取り組みの今後のビジョンをお聞かせいただけますか。

野田 NODA・MAPは、20人前後のアンサンブルを活躍させる作品を10年ぐらいい前からつくっていて、シャイヨーで『エッグ—Egg—』を上演した時は、とびきり評判が良かったんです。何人もの役者が連携して動き、さまざまなシンボリックな形をつくったり、一瞬で個別の人物になったりする表現は欧米ではこれほどにはできないと、イギリスの名だたるプロデューサーから賞賛されました。実際、アンサンブルの中には、優秀なパフォーマーも多くて、僕としても、せっかく出会った人たちと1作で別れるのはもったいない気がしていますし、もうひとつ大きいのは、アンサンブルのためのオーディションを開くと、良い役者全部を選ぶことができないこと。そういう人たちも対象に広がるのある緩やかな役者の集団がつかれないかと考えているところです。緩やかさの加減が非常に難しいんですが。

—— 特定の作品のオーディションだと、全体のバランスや男女比率などで、どうしても“水準に達していても選から漏れる人”が出てしまう。

野田 そういことです。同じタイプだと、どちらかひとりを選ばないといけないです。それとオーディションを3、4日かけて実施していますが、時々、最初は目立たなかったのに3日目ぐらいに急に伸びるタイプがいるんです。たとえば阿部サダヲがそうでした。彼は若い時にNODA・MAPのワークショップに参加しているんです。その前に下北沢の劇場で、宮藤(官九郎)が作・演出した舞台で彼を観ていて、おもしろいと思って声をかけたんですが、短期間ではなかなか良いところを出し切れなかったのを覚えています。でも経験上、初日に目立つ俳優より、だんだん気になってくるタイプのほうが、後々おもしろいんですよ。良い俳優かどうかは1日観ていれば大体わかりませんが、伸び代がどれくらいあるかは短期間ではなかなかわかりません。

—— じっくり出会い、時間をかけて関係をつくり、その先に上演があるよ



提供: NODA・MAP

うな、長期的な育成の場をつくりたい、ということでしょうか?

野田 ええ、場をつくるのが非常に重要ですね。もちろん誰かひとり才能のある人がいて、そこに集まって来るという形もありますけど、出会う場所を用意して、集まった人がそこから勝手に動いていくほうが成長は大きいと思います。というのは、アンサンブルで知り合った役者たちの何人かが集まって創作を始めたし、リロ・パウアー(野田が留学時代に学んだテアトル・ド・コンプリシテの元メンバーで、国際的に活躍する俳優、演出家)のワークショップに参加した役者たちからも「せっかくこうやって出会えたのに、次につなげていく機会がない。芸劇でそういう制度をつくれませんか?」という言葉ももらったりしたんです。

—— 芸劇では、世界レベルの講師を海外から招き、プロの俳優を対象にしたワークショップを不定期に開いています。リロさんのクラスは野田さんのたつての希望で実現し、受講者にも好評で2年連続で開催されたんですよね。野田 その意見は確かにもっともで“オーディションに落ちたら終わり、ワークショップをやって終わり”ではない受け皿は必要かもしれません。

—— そうい人達の稽古見学や発表会を観客に観てもらうのも良いのでは不会でしょうか? 先ほどのシャイヨーの会見のように、演劇ファンにとつて、劇場や俳優を身近に感じる好機になると思います。

野田 幸い、講師の候補はたくさんできました。コンプリシテで出会った人達とはリロだけでなく関係が続いていて、結構な面々が『One Green Bottle』を観に来てくれたんです。みんな年は取りましたけど、相変わらず精力的で、ほとんどの人がいろいろな場所で演技や演出を教えている。「日本にも教えに来てもらえる?」と聞いたら、数人から大丈夫だと言ってもらえたので、もしリロのスケジュールがいっぱいでも、代わりを任せられる人は何人かいそうです。—— 芸劇の芸術監督に就任された時から「いつか将来的に、劇場付きの劇団みたいなものが持てたらいい」ということはお話しされていましたね。

野田 良いものを持っているのに、磨く機会がなくてもったいない俳優は結構いますから。まあ、そこを考えると、良い演出家ももっと出てきてくれないと、ということにも突き当たるんですが。

—— 演出家のサポートについては、第一歩として、芸劇eyes関連の演出家を芸劇主催のプレイハウスでの公演のゲネに招待するというお話を前号のインタビューでしていただきました。他にもアイデアがありましたら、またいつかお話を伺えたらと思います。

稚拙さの中にあつた重要性

—— 最後に、9月の東京公演を皮切りに、パリ、大阪、北九州と長期ツアーが控える『贗作 桜の森の満開の下』についてお聞きします。2017年の歌舞伎版を含めると5度目の上演で、初演から約30年経ちますが、戯曲は手を加えられますか?

野田 今、初演のほうを読んでいるんですけど、再演の時に切ったところが、実はきわめて大事だったことに気が付いているところです(笑)。若い時に書いたから稚拙に感じられて、再演の時は「ここは要らないだろう」と判断した箇所が、実は深いところで(テーマと)繋がっていて、まさしく重要だったんですよ。それと、今回これだけ豪華で達者な役者が集まりましたから、どの役も「この人がやったらきっとおもしろくなるな」という欲も出てきました。くだらない駄洒落も、どうせフランス語では通じないので(笑)、遠慮せずに残そうかと考え中です。

—— とすると、初演に近い『桜の森〜』になりそうですか?

野田 台本としてはですね、でも、まだ決めかねているので、ただ演出は全く違います。そこも楽しみにしてほしいです。

取材・文:徳永京子



Photo: Helen Maybanks



Photo: Akira Suemori

野田秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。92年に「劇団 夢の遊戯社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画制作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『バンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MWA』『逆鱗』『足跡姫』『One Green Bottle』など、時代に抗を穿つ話題作を発表。モーツァルト歌劇『フィガロの結婚—庭師は見た!—』等、オペラの演出、海外の俳優やスタッフとの共同制作、2017年は9年ぶりとなる、『野田版 桜の森の満開の下』で歌舞伎の脚本、演出を手がけ、大きな反響を得る。演劇界の旗手として枠を超えた精力的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都などで、国内外の多種多様な表現者達と新たな幻想的な表現を創出する文化サーカス「東京キャラバン」を実施。2017年、十八代目中村勘三郎とのタッグが話題となった伝説的作品『表に出るいっ!』を、『THE BEE』の最強キャストとともに、新たな英国版「One Green Bottle」として創作。東京、韓国、ロンドン、ルーマニアで上演し、好評を博している。2018年9月〜11月、NODA・MAP第22回公演「贗作 桜の森の満開の下」を東京、大阪、北九州、パリで上演予定。世界を駆け巡り、意欲的に活動を展開している。

作・演出:野田秀樹
NODA・MAP第22回公演
「贗作 桜の森の満開の下」
【詳細はHPへ】 www.nodamap.com/

特集はP6へ